

Title	サッカーのユース選手育成についての研究：オランダサッカーの育成システムに関する一考察
Sub Title	The development of youth football players : a study of the Netherlands' program for the development of athletes
Author	須田, 芳正(Suda, Yoshimasa) 岩崎, 陸(Iwasaki, Atsushi) 松山, 博明(Matsuyama, Hiroaki) 福士, 徳文(Fukushi, Norifumi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2019
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keiō university). Vol.58, No.1 (2019. 1) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	By examining previous studies on the development of athletes for global competition alongside the notes the author took while attending courses in the Netherlands, this study aims to provide insight into how programs for athlete development in Netherlands football are run. The purpose is to build a foundation for future studies concerning the development of youth football players. This study finds that the program in the Netherlands reflects the country's culture and history. The theory regarding the development of youth football players that is said to have originated in the Netherlands has been copied by many around the world. Countries adopt this method and style it in a fashion that suits the status they are in, creating a unique system of youth athlete development that also serves as a leading indicator of the state a country or club is in.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00580001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サッカーのユース選手育成についての研究 ～オランダサッカーの育成システムに関する一考察～

須田 芳正* 岩崎 陸**
松山 博明*** 福士 徳文****

The development of youth football players : A study of the Netherlands' program for the development of athletes

Yoshimasa Suda¹⁾, Atsushi Iwasaki²⁾,
Hiroaki Matsuyama³⁾, Norifumi Fukushi⁴⁾

By examining previous studies on the development of athletes for global competition alongside the notes the author took while attending courses in the Netherlands, this study aims to provide insight into how programs for athlete development in Netherlands football are run. The purpose is to build a foundation for future studies concerning the development of youth football players. This study finds that the program in the Netherlands reflects the country's culture and history.

The theory regarding the development of youth football players that is said to have originated in the Netherlands has been copied by many around the world. Countries adopt this method and style it in a fashion that suits the status they are in, creating a unique system of youth athlete development that also serves as a leading indicator of the state a country or club is in.

キーワード：サッカー，ユース育成，オランダ

Key words : Football, Youth development, The Netherlands

緒 言

技術・戦術の高度化が進むサッカーにおいて、ユース年代からのタレント発掘と育成システム（Talent Identification and Development, 以下ユース育成）を整備することは、各国、各クラブにおける将来の「先行指標」（村井 2018）になると言われている。2014年に行われたFIFA ワールドカップブラジル大会で優勝したドイツは、1999年に育成プログラムを改革し、2006年には才能の発掘と育成について強化指針を発表。366カ所に拠点を

置き、およそ1400人の指導者を配置した。そして、2002年から2016年まで述べ約60万人の参加者がトレーニングプログラムにのっとり技術、戦術のベースを細部にわたってトレーニングを行った（JFA 2014）。

またベルギーでは、ミシェル・サブロン（注1）がオランダ、フランス、ドイツといった近隣諸国の代表やアヤックスやバルセロナなど育成に定評のあるクラブを視察して回り（小川 2017）、それをもとに2006年にサッカー協会主導の育成プログラムを完成させた。育成メソッドの普及やエリートスクールの設立、各クラブの環境

* 慶應義塾大学体育研究所准教授
** 宇都宮短期大学附属高校教諭
*** 追手門学院大学教授
**** 慶應義塾大学体育研究所助教

1) Associate Professor, Institute of Physical Education, Keio University
2) Teacher, Utsunomiya Junior Collage Attached High School
3) Professor, Otemongakuin University
4) Research Associate, Institute of Physical Education, Keio University

を可視化して評価するシステム（注2）を導入し、優れたクラブに資金を傾斜配分するなどの取り組みを行ったことが2018年FIFAワールドカップで3位という好成績につながったと考えられている。サッカーの母国であるイングランドでも、2010年のFIFAワールドカップ南アフリカ大会でのラウンド16での敗退を受けて、サッカー協会主導で育成システムの構築に着手し（JFA 2018）、育成年代の大会でその活躍が評価されてきている。

日本においては、公益財団法人日本サッカー協会（以下 JFA）が主導し、各地域の優秀なタレントを一箇所に集めて継続的にトレーニングを行うトレーニングセンター制度や全国から優秀な選手を集め、寄宿舎に住まわせて教育をするエリートアカデミーなどの育成システムを導入してきた。前者はドイツ、後者はフランスに範を取ったユース育成である。また近年では、Jリーグ主導のもと、ベルギーやドイツが取り入れたプロクラブの育成環境を可視化するシステムを導入し、世界基準で改善する取り組みを行っている。

このように、中長期的にサッカー協会主導で育成システムを改革し強化を図った国がFIFAワールドカップなどの大会で成功を取っている。

本研究では、スポーツ選手の育成、国際競技力の向上に関わる文献をレビューすると共に、筆頭著者がオランダ滞在中に参加した指導者講習会やインストラクターへの質問に対する回答などのメモをもとに、オランダサッカーの育成プログラムについての現状をまとめ、今後のユース選手育成に関する基礎的資料を得ることを目的とする。

先行研究

1. スポーツの国際競技力に関する先行研究

De Bosscher ほか（2008）は、国際競技力と特定国際競技力向上の要因について文献調査を行い、人口や経済的な裕福度等といった社会的、文化的な要因に基づくマクロレベル、スポーツ政策や政治といった長期的な競技成績に影響する要因に基づくメゾレベル、個々の競技者の遺伝的要因や兄弟、友達、コーチなど、競技者に近い要因に基づくミクロレベルの3つのレベルに分類している。そのうえで国際的な競技力向上の取り組みに関する国家間の比較やエリートスポーツシステムやその要素を理解しようという試みは増えているが、多くの研究は国際間で比較するための観点が定まっていないこと、国の

人口と豊かさが国際的なスポーツにおける成功を50%以上説明するといったマクロレベルにおける研究は多くなされているが、各国政府や競技団体などによるメゾレベルの競技力向上のための政策などによって強化方法は多様化しており、必ずしもマクロレベルの要因とリンクしないような現象が増えてきていることを指摘している。

さらに De Bosscher ほか（2009）は、各国政府や競技団体が国際競技力向上のために大規模な投資をしている中で、スポーツ政策が国際競技力向上にどのように影響しているかを客観的に示す証拠がないとして、国際競技力向上に資するスポーツ政策の要因を分析する概念的なフレームワークを示す研究を行った。そして、世界のエリートスポーツ政策に影響を与えた旧共産国の分析を主とした文献研究を行い、国際競技力向上の重要な要因として、9つの Pillar（① 十分な財政支援が得られているか、② スポーツ政策の組織体制と構成が適切か、③ スポーツ参加が十分になされているか、④ タレント発掘・育成システムが整備されているか、⑤ 選手のポストキャリアサポート・競技サポートがなされているか、⑥ トレーニング施設が充実しているか、⑦ コーチの確保・養成がなされているか、⑧ 国際・国内競技大会が十分か、⑨ 医・科学研究の成果が反映されているか）からなる Sport Policy Factors Leading To International Sporting Success（以下 SPLISS）モデルを構築した。そして、9つの柱それぞれに国際比較可能な主要成功要因（Critical Success Factor）を定義し、ベルギー、オランダ、イギリス、カナダ、ノルウェー、イタリアの6か国のエリートアスリート及びコーチに対して質問紙調査を行い、比較を行った。各国のスポーツにおける文化的、経済的な背景が異なる中で、主要成功要因による定量的な評価の結論がでていないとしながらも、財政支援、ポストキャリアサポート・競技サポート、トレーニング施設、コーチの確保・養成が最も成功しているいくつかの国で高い評価を示し、重要な成功要因であることが示唆されたとしている。

さらに、舟橋（2012）は上記モデルの各 Pillar における主要成功要因を評価項目として、国際競技会で一定の競技成績をあげている日本国内のエリートアスリートに対して、競技環境に関する調査を実施した。その調査において、タレント発掘・育成、競技サポート、トレーニング施設、およびコーチの確保・養成が日本のエリートスポーツシステムの成功要因であることを明らかにした。またポストキャリアサポートが政策的に不十分である

ことを明らかにした。エリートアスリートにおいては、エリートスポーツ環境の総合的な評価と国際競技大会におけるメダル獲得には関連性がなかったことで、エリートアスリートには同水準のエリートスポーツ環境が整備されていると考えられるとしている。さらに Pillar ごとの評価によると、国際競技大会におけるメダリストは、メダル獲得経験のないエリートアスリートよりも「医・科学研究」のみにおいて評価が低いことを確認された。ただし匿名性を保つために、競技別のサブ分析は行っておらず、課題として競技に応じたどのような環境を構築していく必要があるかという検討が必要としている。

英国の経済学者である Konzelmann (2013) によると、旧共産圏のタレント選別、コーチングや医学サポートやベストな施設の提供に基づくアスリート強化策は、一時期メダル全体の55パーセントものメダルを旧共産圏の国々にもたらしたが、旧ソ連の崩壊とともに長続きしなかった。また、一時的な効果が明白であったために、他国の競技スポーツ政策に強い影響を与えたが、イデオロギーの違いにも関わらずそれを模倣した国の多くは、国際的な成功を収めることができなかった。それは旧共産圏が編み出した方法が急速にグローバル化したことで、競技力強化のための最低必要条件となり競争力を失ったからだとしている。

2. ヨーロッパにおけるサッカー選手育成に関する先行研究

松原ほか (2009) は、フランスの国立サッカー学院を中心としたフランスサッカー協会のエリートユース選手育成に関する調査を行い、日本の育成年代の選手にとって質の高い環境（練習施設等の物的環境、及びコーチ等の人的環境）を整備することの重要性を指摘すると共に、勝利至上主義に陥らないようコーチの再教育の場が必要であるとしている。また、藤井ほか (2004) は、ドイツサッカー連盟が推進するタレント育成プログラムの内容と特色を「1. 地域の拠点となるタレントセンターの設立」、「2. クラブ指導者への情報提供および講習」、「3. 学校との連携の推進」、「4. 各ユース年代のナショナルチームの強化」として紹介している。その中で、タレントが日々活動する各クラブの指導者の資質向上なくして、サッカー連盟主導の育成プログラムの最大限の効果は期待できないという共通認識がドイツサッカー連盟内にあるとしている。

内藤ほか (2013) はイングランドサッカー全体の構造

とイングランドのユースシステムの概要を調査し、その中でイングランドは他のヨーロッパの育成システム（フランス、オランダなど）を参考に、サッカー協会主導で選手育成のための環境整備や、勝利至上主義ではなく育成を重視する試合形式の採用を行っていることを紹介している。

先行研究の考察

国際競技力に関わる先行研究では、SPLISS モデルのように、競技力を向上する成功要因の分析はなされているが、成功要因が各国に普及すると競争力を失うため、ある国が成功要因を単に模倣しただけでは、結果的に成功を収められないことが示唆されている。制度経済学の研究で知られる青木 (2014) は、今の日本が必要としている人口と雇用構成の永続的な変化への対応には「一世代＝30年」という時間が必要であるとし、1993年のバブル崩壊や自民党一党支配の終焉を画期とした「移行行く30年」の正念場が2020年の東京オリンピック開催と時を同じくすると述べている。「社会の基底に横たわるもの」としての制度の研究を行ってきた青木 (2014) の主張が正しいとすれば、各国、各クラブにおける将来の「先行指標」である育成の成果を得るには、中長期的な15年から30年の時間が必要であり、中長期的な視野をもって選手を育成していくことこそが、サッカー先進国であり続ける必須条件であると考えられる。

ところで、ヨーロッパにおけるサッカー選手育成に関する研究では、ヨーロッパ各国における育成システムの概要が紹介されているが、そのシステムが各国のどのような背景に基づいて構築されたものなのかについて言及されていない。Henry (2004) は、スポーツ組織が伝統的な政府やスポーツ組織からのトップダウンのシステムからその組織内外の多様なステークホルダー（クラブ、クラブスポンサー、メディア、地域、サポーターなど）が、異なる方法や文脈で複雑に影響しあって蜘蛛の巣上に協力関係を描く複合的な組織形態に移行していると述べている。複合的な組織形態をなす育成システムにおいて、サッカー協会主導で行っているメソッドをそのまま取り入れるだけでは、あまり効果がないことは明白である。

福沢諭吉は「文明論之概略」のなかで、外国の文明を自国に取り入れることに対して、

外国の文明を半開の国に適用するには、言うまで

もなく取捨選択がほどよいことが大事である。しかしながら、文明には外に現れる事物と内側にある精神の二面がある。外に現れた文明を採用するのは簡単だが、内側にある文明を求めることは難しい。国の文明化を目論むには、その難しいことを先にして容易なことを後にし、難しいものを得る度合いに応じてしっかりと精神の深浅を測り、容易なものに適用して、正しくその深浅の程度に合わせざるを得ない。もしこの順序を間違えて、未だ精神の難しいものを得る前に先に容易な文明の外形を得ようとする、単にその用を果たさないだけでなくかえって害を生むことが多い。

と述べている。

では、一つの国またはクラブが、サッカーのユース選手育成システムを整備する上で、外に現れる事物が具体的なトレーニングメソッドや制度とすると、何が内側にある精神なのだろうか。

筆頭著者は2007年9月から2009年8月の2年間、サッカー選手の育成プログラムの発祥の地と言われるオランダにてサッカー指導者の研修を受け、ヨーロッパサッカー連盟（以下 UEFA）の発行するサッカー指導者資格である UEFA B ライセンスを取得した。

オランダは1970年代に世界に先駆けて育成システムを整備した。そのシステムはヨーロッパをはじめ世界各国で模倣され、その国の状況に応じた改善が繰り返されている。筆頭著者が受講した指導者講習会においても各国からの視察が相次ぎ、その様子を目の当たりにしてきた。「サッカーは文化であり、オランダサッカーはオランダ人が歴史と生活から生み出したもの」（梶 2000）であるとする、オランダの選手育成システムが生まれた歴史的、文化的背景といった内側の精神を明らかにすることが、我が国の育成システムを考察するうえで意義があると考え、本研究ではオランダについて取り上げる。

オランダサッカーについて

1. オランダサッカーの特徴

Royal Netherlands Football Association Academy International Coaching の“*Youth Development: Masterplan for Youth Football*”では、オランダサッカー協会（以下 KNVB）が考えるオランダサッカーの特徴は以下の通り記されている（2007年時点、筆頭著者による和訳）。

- ・16,000,000人の人口
- ・フットボールがナンバー1スポーツである。
- ・36のプロフェッショナルクラブ
- ・3,000のアマチュアクラブ
- ・1,000,000人のメンバー
- ・460,000人のユースプレイヤー
- ・ザイストにあるナショナルオフィス
- ・6箇所の地域オフィス
- ・ナショナルスタッフコーチ
- ・20人の地区スタッフコーチ
- ・50人の地域コーチ

（上記のコーチは、3,000クラブの公認、またはボランティアのすべてのユースコーチに影響を与えている）

- ・2,500の地域社会のフットボール拠点
- ・10,000のトレーニングおよび試合のための芝のフィールド
- ・クラブ文化3,000のアマチュアクラブ

これらの特徴を総合すると、オランダでは、国土の大きさや人口の割に、サッカークラブやサッカー人口、コーチの数が多いといえる。このような特徴はこれまでのオランダサッカー、選手育成プログラムの成り立ちと関係があると思われる。

2. オランダサッカー、選手育成プログラムの成り立ち

石川ほか（2010）は、サッカーに焦点を当てて近代オランダにおけるレクリエーションスポーツの普及について報告している。オランダのサッカーは19世紀にイギリスから伝播し産業化がすすむなかで、19世紀後半に上層階級から下層階級へと普及していった。その後、1919年に労働時間を8時間と定める法律ができ、労働者の自由時間が増加したこともレクリエーションとしてのサッカーの普及を加速させた。加えて、労働者階級の子供たちの教育機会が増えたことで、教育期にある若者たちの間で学校を中心としてサッカークラブが形成されていった。企業家や教育機関がチーム意識を高め、レクリエーションとしての機能を有するサッカーの教育的な価値を認め、普及を促したこともオランダにおいてサッカーが国民的なスポーツとなりえた要因であることを示唆している。

KNVB は子供たちが自由にプレーするストリートサッカーから得られるあらゆる知識についてまとめ、子供た

ちがサッカーを学ぶための「オランダの見解」を形成し、サッカートレーニング、サッカーコーチングに導入したと、秋田（1998）は述べている。1950年、1960年代は子供たちがサッカーに親しむ場は、主にストリートであり、自発的に集まったメンバーで、時間を忘れてサッカーを楽しむことが中心であった。その中で、子供たちは楽しみながらサッカーの技術を習得していった。1960年代後半になると、車を中心とした交通量が増え、路上は混雑し、サッカーをするには危険が伴うようになった。そのため子供たちは、クラブでのサッカーがストリートサッカーにとって代わるようになり、コーチの指示に従って、決められた時間でプレーする環境の中、主体的にサッカーを楽しみ、技術を磨く時間を失っていった。つまり、「子供達は6学年以降、サッカークラブの会員になることができる。しかし、そこではせいぜい週に2時間練習し、短時間の試合をひとつ行うくらいである。当然、時折ボールを蹴ることから疎遠になる子供達がいる。そして、サッカーではないほかのスポーツ、趣味、そしてテレビを見るのが優先してくるのである」（秋田 1998）という状態であった。比較的人口が少なく、国土も小さいオランダにとって、サッカーをする若年層の人口が増えなければ、オランダ国内でのスポーツの地位、世界での地位（ワールドカップでの活躍）を確立することができなかつた。

そこでオランダのユース選手育成は、子供達が自らサッカーを楽しみ、学ぶことが上達する一番の道であることを念頭に置いて、コーチ、プレーヤーがサッカーを学ぶための方法がプログラムされている。このプログラムは短時間で高品質のサッカー活動（トレーニングや

試合）をより多く学ぶために11対11のサッカーの特性、特徴をできるだけ保てるように単純化したものであり、サッカーにおけるプレーの局面が定義され、プレーシステムが推奨され、それぞれのポジション毎の役割、各年代でのトレーニング方法、試合の分析方法が詳細にプログラム化されている。その根底には、オランダの文化思想家であるヨハン・ホイジンガは「人間はホモ・ルーデンス（遊ぶ人）である」という哲学が反映されているといえよう。

120年以上の歴史を持つオランダのサッカーは、まず初めに複数のクラブができ、そのクラブ間の試合を統括するための組織としてサッカー協会ができた。オランダのユース選手の育成システムもKNVBが主導したのではなく、1970年代にプロクラブチームであるアヤックスが開発したものをKNVBが取り入れ、普及したものである。そのため、オランダの指導者講習会では、アヤックスのクラブ視察がプログラムに盛り込まれている。トップダウンだけでなく、ボトムアップで積み上げられた育成ノウハウが、KNVBという組織を通して、組織化され、各指導者、クラブに共有される仕組みとなっている。

アヤックスの育成システムは、6歳から始まり19歳まで年齢別に発達段階に応じたプログラムが構成されている（図1）。かつてのアヤックスの育成責任者であったコ・アドリアンセは、アヤックスの育成哲学（図2）を次のように述べている。「トップチームのプレーにはアヤックスの全てが、トータルフットボールが凝縮されている。子供たちはトップチームのプレーを見ながら、自分のプレーの土台を凝縮していく。子供たちは、トップチームのプレーを目の当たりにすることで、サッカーの



Ajaxの育成システム

- A1 (U19)
- A2 (U18)
- B1 (U17)
- B2 (U16)
- C1 (U15)
- C2 (U14)
- C3 (U13)
- D1 (U12)
- D2 (U11)
- D3 (U10)
- E1 (U9)
- E2 (U8)
- E3 (U7)
- F (U6)



図1 アヤックスの育成システム



Ajaxの育成哲学

- トップチームと同じプレースタイル
(美しく、インテリジェンスあるサッカー)
- 基本コンセプトTIPS
- スカウティング
- 科学的トレーニング
- 学習活動
- ディシプリン



図2 アヤックスの育成哲学

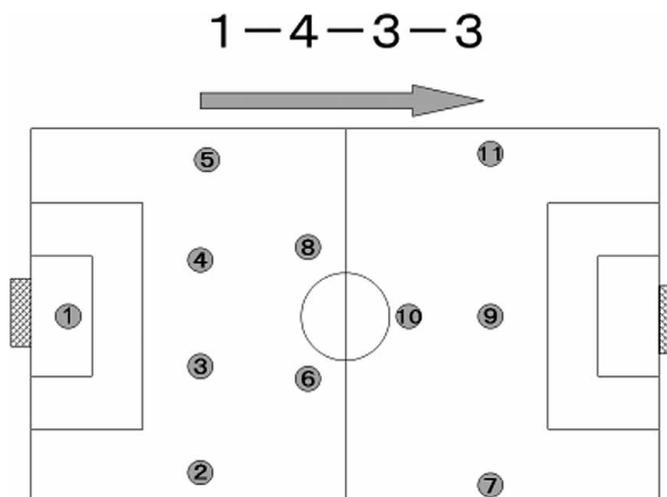


図3 1-4-3-3のプレースタイル

本質を理解する。アヤックスでは、育成の段階からトップチームと同じ両サイドにウイングを配した攻撃的なプレースタイル「1-4-3-3」(図3)を学ぶ。アヤックスでは子供のときから、このスタイルを16人の少人数で集中的に行う。そうすることで、美しくかつインテリジェンスのあるサッカーが生まれる。」(糀 2000)

3. オランダのサッカーと気質

オランダサッカーの特徴は、「美しく魅力的な攻撃サッカーである」。糀(2000)はオランダのサッカーが攻撃的であるのは、単に戦術、戦略的なものではなく、オランダ人の気質や考え方に密接に関連している。そしてオランダ人にとって一番大切なことは、「イニシアティブ」をとることであると述べている。「これは狭い国土を干拓し、通商と航海で国を豊かにし、商工業で経済を支えてきたオランダ商人が、独立と繁栄の歴史から学んだ優れた知恵である。」(糀 2000) 筆頭筆者も実際にオランダで生活する中で、オランダ人は我が強く、何があるかと自分のやり方を通す性格だと感じたことから窺える。

サッカーにおいてイニシアティブをとるということは、攻撃を続けることである。攻撃的であるためには、常に自らがボールを保持し、ゴールを狙うことである。ボールを失ったら相手のボールを即座に奪い返すため、ボール保持者にプレッシャーをかけるプレッシングを行うこと、これらがサッカーにおいてイニシアティブをとるために必要なプレーである。そのようなプレーを実行できる選手を育てるために、オランダではオランダ独自の選手育成プログラムを作る必要があったと思われる。

4. オランダの歴史、文化と育成システムについて

4-1. ボルダーモデルと、ワークシェアリングによるパートタイムコーチ

イノベーションやデザインの研究者である紺野(2012)は、オランダやオランダ学の専門家ではないと断った上で、オランダは、低い土地である特性から、これまで数々の洪水に襲われ、多大な被害を出してきたことから、その災害を通して、「Social Thinking」(社会的な思考)、「Social Capital」(社会的資本)を培ってきたと述べている。また、ボルダー(干拓地を単位とするコミュニティ)を単位として、協力をもとに危機を回避しようとするコミュニティ文化から、階層を超えた協力や対話を重視する気風であるボルダーモデルが生まれた。オランダは1984年には失業率が15パーセントに達する経済不況を経験したが、政界・財界・労働組合が話し合った結果生まれた「ワッセナー合意」により、「オランダの奇跡」と呼ばれる経済回復を生み出した。フルタイムとパートタイムジョブの境を極力なくするワークシェアリングの考え方はボルダーモデルによって生まれた。筆頭著者がオランダ在留中には、各クラブのコーチの多くが、コーチを専業とするのではなく、パートタイムで関わっていた。「有能な人材ならスポットで活躍する発展的な弾力性と柔軟性を持っている」ことで、社会で活躍する多様な人材が、サッカー界で活躍することができたことが、オランダのユース育成プログラムの発展につながっていると考えられる。

4-2. オランダの移民政策と育成システムの関係

紺野（2012）は、オランダは歴史的に、多文化主義に基づく寛容な移民政策を取ってきた。戦後は労働力不足を補おうと、南欧、トルコ、モロッコなどから大量の労働者を「ゲストワーカー」として受け入れた。移民の比率が高まることによって、異文化間の衝突を理由とする社会問題も少なくないと述べている。しかし、サッカーに代表されるスポーツは、同じルール、それぞれの特徴を生かして、チームで融合するといった特徴から、異文化間の相違を融合する内在的な価値を持っている。移民の持つ異なる文化的背景からくる価値観や身体的特徴が組み合わせられて、ボルダーモデルのもと協力することで、さらに強いチームができる。ディヴィッドほか（2008）は、1980年代にオランダ代表として活躍したスリナム（南アメリカの北東部に位置する、かつてのオランダ領ギアナ）出身のルート・フリーットや1990年代に活躍したエドガー・ダーヴィッツは「スリナム人特有の高い身体能力、ブラジル人のようなラテン的要素を持ち、オランダの冷静なプレースタイルも併せ持っていた」と述べている。2010年（準優勝）、2014年（3位）のFIFAワールドカップでの栄光は移民なくしては起こりえなかったと思われる。

まとめ

オランダのサッカーは、オランダ人の気質や考え方が反映されている。そして、オランダのユース選手育成は、ストリートサッカーで子供達が自らサッカーを楽しみ、学ぶことこそが上達への一番の道であるとの共通理解に基づき、コーチ、プレーヤーがサッカーを学ぶための方法がプログラムされている。その原点には、「人間の文化は遊びのなかにおいて、遊びとして発生し、展開してきたものだ」というヨハン・ホイジンガの考え方に基づいた、「サッカーは遊びである」という思想が根本にある。また、ボルダーモデルに現れる協力の精神が、優秀なコーチを生み出すワークシェアリングの仕組みや、移民政策による多様な文化的、身体的な特徴を持った移民との融合を生み出し、そのような社会的な背景がユース選手育成システムに反映されている。

このように、オランダの選手育成システムはオランダの文化・歴史的背景を反映したものとなっている。オランダが発明したと言われるユース選手の育成に対する考え方は、現在世界中で模倣され、各国の状況に応じて工

夫や改善を繰り返す中で、その国に適合した育成システムが構築され、ユース選手の育成環境が各国やクラブの「先行指標」となるまでになっている。オランダがサッカー選手の育成環境を整備した背景には、自国の状況を鑑みて、ストリートサッカーに始まる選手が主体的に楽しむスポーツの本質を保ちながら、選手や指導者がサッカーを理解するための枠組みをプログラム化したことが、世界に模倣される基本の考え方となったと推測される。

今後は日本サッカーの育成システムについて考察していく予定である。他国に学びながらも、学校教育とのつながりが深い我が国独自のシステムや今後の人口減少などの社会情勢を考慮し、日本のスポーツ環境に適応した育成システムを構築していく必要があると考える。

注 釈

（注1）1986年ワールドカップでベルギー代表のアシスタントコーチを務め、1996年にEURO2000の責任者に選ばれる。その後ベルギーサッカー協会のテクニカルディレクターになり、長期育成プラン構想を立ち上げる。

（注2）クラブの「フィロソフィー」「カリキュラム」「メソッド」「ミーティング」「選手評価」「情報共有」「戦略」「構造」「HRM（人事管理）」「運営管理」「チーム強化」「個の育成」「タレント発掘（リクルート）」「スタッフ」「施設」「生産性」など約400項目の幅広い項目からトータル5000点満点で査定するシステム。

引用・参考文献

- [1] 秋田浩一 (1998). オランダサッカーの報告 (その1), 駒沢大学紀要
- [2] 青木昌彦 (2014). 青木昌彦の経済学入門, 筑摩書房, 東京
- [3] デヴィッド・ウィナー (2008). オレンジの呪縛, 講談社
- [4] De Bosscher et al. (2008). A Conceptual Framework for Analysing Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success. *European Sport Management Quarterly*. 6(2) : 185-215.
- [5] De Bosscher et al. (2009). Explaining international sporting success: An international comparison of elite sport systems and policies in six countries". *Sport Management Review* 12, pp.113-136.
- [6] 藤井雅人ほか (2004). ドイツサッカー連盟のタレント育成プログラム: 2002年施行の最新プログラムの内容と特色 (11. 体育科教育学, 一般研究発表)". *日本体育学会大会号*(55). pp.629.
- [7] 福沢諭吉 (1875). 文明論之概略, 三浦良
- [8] 舟橋弘晃 (2012) 日本のエリートスポーツシステムの成功要因: エリートアスリートのエリートスポーツ環境の評価による検討. 2012年早稲田大学修士論文.
http://www.waseda.jp/sports/supoken/research/2011_2/5010A078.pdf
(参照日: 2014年12月31日)
- [9] Henry, I. & Ping Chao Lee. (2004). *Governance and Ethics in Sport. The Business of Sport Management*, Prentice Hall : UK, 25-42
- [10] Houlihan (2013). *Sport Policy in Britain*. Barrie Houlihan Routledge Research in Sport, Culture and Society: UK
- [11] 出雲輝彦ほか (2008). スポーツ政策の現代的課題. 日本評論社: 東京, pp.120.
- [12] ジュリエット・コービン, アンセルム・ストラウス: 操華子ほか訳 (2012). 質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第3版). 医学書院: 東京
- [13] 金子史弥 (2011). 第4節 スポーツ組織と行政のパートナーシップ. 菊幸一ほか編. *スポーツ政策論*. 成文堂: 東京, pp.132.
- [14] 菊幸一 (2006). *現代スポーツのパースペクティブ*. 大修館書店: 東京
- [15] 菊幸一 (2013). *スポーツ文化の視点と生活者の「からだ」*, 情報誌 CEL vol.103. p.27.
- [16] 紺野登 (2012). *幸せな小国オランダの智慧*, PHP 新書, 東京都
訳, www.umiheyuku.com/images/change03_03.pdf
(2018.8.02参照)
- [17] 公益財団法人日本サッカー協会技術委員会監修 (2011). 第7回フットボールカンファレンス報告書. 財団法人日本サッカー協会: 東京, pp.196-199
- [18] 糀正勝 (2000). *オランダサッカー強さの秘密*, 三省堂
- [19] 松原英輝 (2009) フランスのサッカー選手育成の現状について—育成年代における一貫指導体制の現状と特徴—. *大阪大学紀要第VI部門*. 第57巻第2号, pp.241~258.
- [20] 松村和則 (2006). 第13章スポーツ環境論の課題. 菊幸一ほか編. *現代スポーツのパースペクティブ*. 大修館書店: 東京, pp.245-263.
- [21] 御園慎一郎 (2013). *政策を定める*. 高橋義雄ほか編, スポーツで地域を拓く. 東京大学出版界: 東京, pp.209.
- [22] 佐々木康 (2008). *英国ラグビーとクラブ組織 (第2刷)*. 創文企画: 東京, pp.10-11
- [23] サイモン・クーパー, ステファン・シマンスキー 森田浩之訳 (2010). 「Japan」はなぜ負けるのか. NHK 出版.
- [24] S.Konzerman, M.Fovargue (2013). *Redefining industrial strategy - What could British medium sized companies learn from Team GB and the elite sports system*.
http://www.eaepeparis2013.com/?page_id=199.
(参照日2014年12月31日).
- [25] 杉浦善次郎 (2006). 第7章スポーツの組織とその論理. 菊幸一ほか編. *現代スポーツのパースペクティブ*. 大修館書店: 東京, pp.138-151.
- [26] 高橋義雄 (1993). *サッカーの社会学*. :日本放送出版協会: 東京
- [27] Vaeyens R, Gullich A et al. (2009). Talent Identification and Promotion Programs of Olympic Athletes. *Journal of Sports Science* 27 : 1367-1380.
- [28] 読売サッカークラブ ~東京ヴェルディ 40周年記念誌発行委員会~ (2010). *クラブサッカーの始祖鳥 読売クラブ~ヴェルディの40年*. 東京ヴェルディ 1969フットボールクラブ株式会社: 東京

(受付: 2018年9月7日, 受理: 2018年10月30日)